

北根室地区における分娩事故、子牛の損耗実態

根室農業改良普及センター北根室支所 齊藤 潔

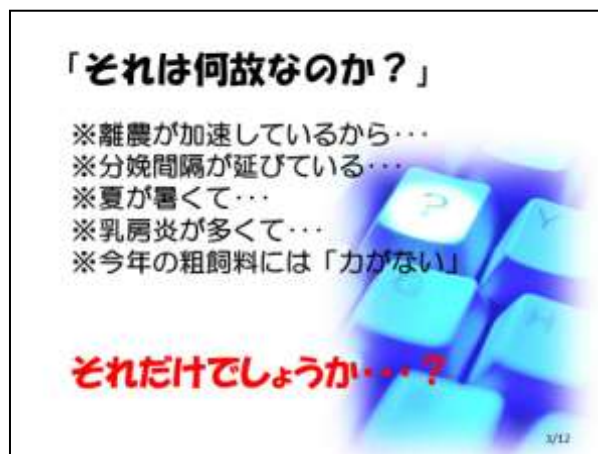
本日は、北根室地区農業改良協議会主催の酪農セミナーに多数参加していただき、誠にありがとうございます。



スライド 1

演題をご覧いただいた通り本日は、帯広畜産大学石井先生より「乳牛と新生子牛のための分娩管理」についてお話しいたします。私の方からは、本セミナーにおいて何故「乳牛と子牛のための分娩管理」にスポットを当てたかについて、皆さんにより理解いただけるよう、北根室地区における分娩事故、子牛の損耗について数字を整理し、若干の問題提起をしたいと思います。

ご存じとは思いますが、我が北根室管内(JA中標津・JA標津・JA計根別)はどうなっているでしょう？生乳生産の推移は、図1(スライド2)にあるように10月現在で根室全体の傾向と同様、前年対比98%で推移しています。



スライド 3

理由を考えてみましょうか？

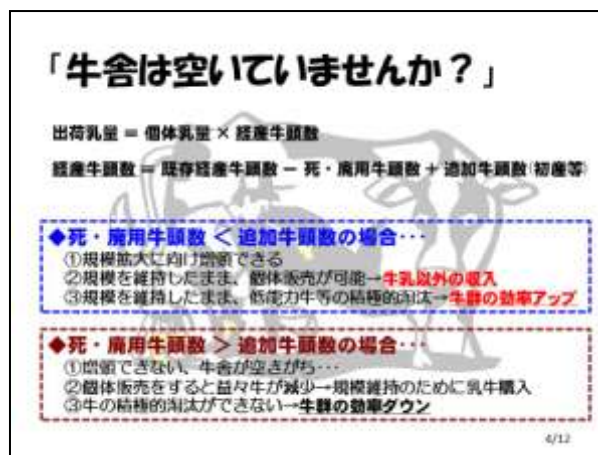
乳量が伸び悩むと、①離農が進んでいるから・②繁殖管理の影響から分娩間隔が延びているから・③夏が暑かったから・④乳房炎発症が多くて・⑤今年の粗飼料に力が無いから・等ということはよく聞きます。

これらの他に要因は無いのでしょうか？



スライド 2

今年は、生乳生産が伸びないとよく聞きます。これから12月にかけて生クリーム・バターの需要が高まる時期です。乳業メーカーから「牛乳が足りない」等の悲鳴が上がっているとの噂もチラホラ聞かれています。



スライド 4

大雑把ではありますが、出荷乳量は「個体乳量に経産牛頭数を乗じたもの」と表現できます。出荷乳量を増やすためには、個体乳量・経産牛頭

数を増加させる必要があります。

個体乳量は「年間出荷乳量を経産牛頭数で除したもの」とご理解いただいていると思います。では、経産牛頭数はどうでしょう？経産牛頭数は「既存経産牛頭数から死・廃用頭数を減じ、追加牛頭数(追加初産牛・購入牛等)を加えたもの」となります。

個体乳量はさておき経産牛頭数に着目しますと「死・廃用頭数<追加牛頭数」ならば、経産牛頭数は増加傾向に向き、規模拡大を目指す方にはスムーズな増頭をうながしてくれますし、規模維持の方は、余った牛を個体販売に向けられます。これが本来の個体販売の形ではないかと思えます。また個体販売をしない場合も、老齢牛や低能力牛等の積極的淘汰も可能となり、牛群自体の能力が向上し、同規模の牛群であってもより効率的な酪農経営が実現できます。反対に事故・疾病の多発により「死・廃用頭数>追加牛頭数」となってしまうと、規模拡大に向けた増頭ができない、もっと深刻になると現状の搾乳スペースが空きがちになってしまいます。それでも経営収支上、個体販売を行わなければならないとなると益々牛が減ってしまう。それでも規模は維持していかななければならないとなると、「牛を購入しなければならない」ということになり、不要な支出が増えてしまう。また積極的淘汰が進まないの、なかなか牛群の効率が向上しないため個体乳量の伸びも期待できなくなってしまうこととなります。

「こんな事が起きている」

- ①死産率は**7.7%** (H24年7月乳検個体データより n:12,934)
- ②ホル雌子牛廃用率は**7.3%** (H24年1~12月個体識別システムより n:7,638)
- ③廃用マタ-頭数に対する初産牛追加マタ-頭数割合**95%** (H25年9月乳検牛群データより n:153)
- ④乳牛雌牛死産事故に占める、妊娠・分娩期及び産後疾患や子牛の肺炎・下痢の割合は**約40%** (H24年根室地区NOSAIデータより 乳用成牛n:6,264、子牛胎児n:5,869)

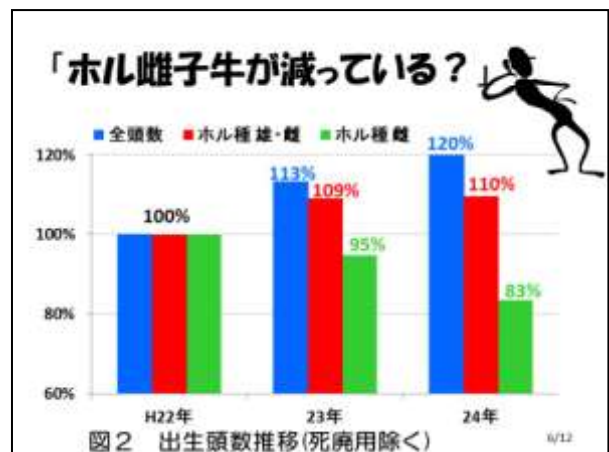
データ:乳検、個体識別システム、根室地区農業共済組合 5/12

スライド 5

さて「牛が増えない」ことを別の角度からも見てみましょう。

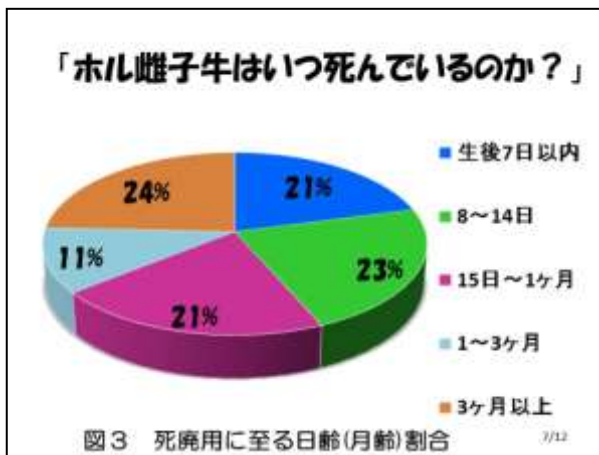
項目①から③は北根室のある農協の全面的協

力を頂きデータを精査したものです。この農協管轄においては、①死産率は7.7%でありました。これは、平成24年7月乳検時の対象個体12,934頭が今乳期において流産したかどうかを個体データから全頭拾い上げたものです。②ホル雌子牛廃用率は7.3%。これは、個体識別システムから平成24年1月1日~12月31日の間に生まれた雌ホルスタインの牛が死産になった割合です。③は平成25年9月乳検時おける数字(9月までの過去1年間)で、廃用で出て行く牛を初産牛などが完全に補うには5%足りないことを示しています。根室地区NOSAIの根室管内全体における「乳牛の雌死産事故病類別発生割合」によると、④乳雌牛死産における約4割は、分娩を転機として起っていることが推察されます。



スライド 6

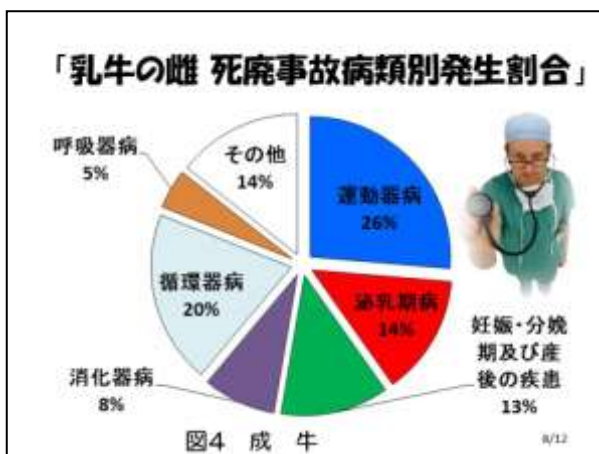
また、先程の個体識別システムデータを平成22~24年までの3年間を比較してみますと、この農協管轄においては図2(スライド6)のような傾向があることがわかりました。平成22年対比で牛全品種(ホルスタイン・ブラウンスイス・和牛・F1等含む全品種)で見ますと、平成23年は13%、平成24年には20%とそれぞれ増加しています。またホルスタイン種(雄・雌含む)でも、それぞれ9%、10%と増加傾向にありました。一方、ホルスタイン種雌に限定しますと減少傾向で、平成24年度は実に17%も減少していました。ちなみに、これは誕生牛の数から死産牛を減じた牛の頭数、すなわち生き残った牛の頭数の推移であります。このことについては後のスライドでも説明しますが、とりあえず、この農協管轄においては、ホルスタイン雌は減少傾向にある事を覚えておいてください。



スライド 7

図2(スライド6)は生き残った牛の頭数の推移と言いましたが、それでは死廃になる子牛は、生後、一体いつ頃に死廃に至っているのか？

これ(図3 スライド7)は、さきほどの個体管理システムデータから「ホルスタインの雌子牛が生後何日までに死廃に至ったか」をグラフ化したものです。全体の65%(生後7日以内21%+8~14日以内23%+15~1ヶ月以内21%)は、1ヶ月以内に死廃に至っているということです。実に65%です。ということは、誕生後1ヶ月の飼養管理には、「子牛を死廃にしない」ための何か重要なヒントがあるかもしれません。

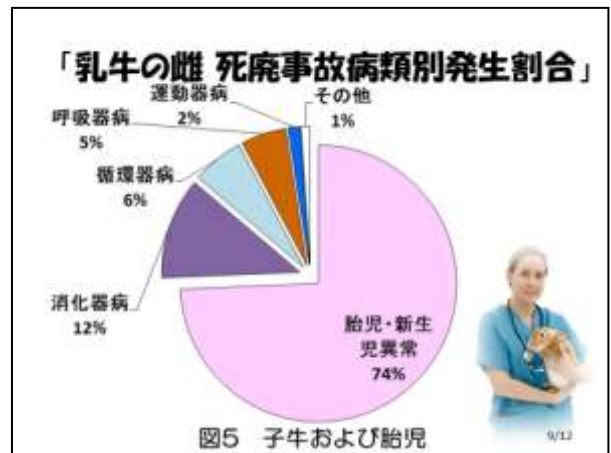


スライド 8

雌牛資源はどうして失われているのでしょうか？

乳牛の成牛においては、「運動期病」に次いで「泌乳期病」そして「妊娠・分娩期および産後の疾患」が死廃病類ベスト3となっています。泌乳期病いわゆる乳房炎で「命を落とす」と言うことは大腸菌性乳房炎が考えられます。また消化器病の代表は第四胃変位。これにケトーシスや脂肪

肝を考えると、妊娠を転機に命を落としている牛がえ4割以上いることが推測できます。

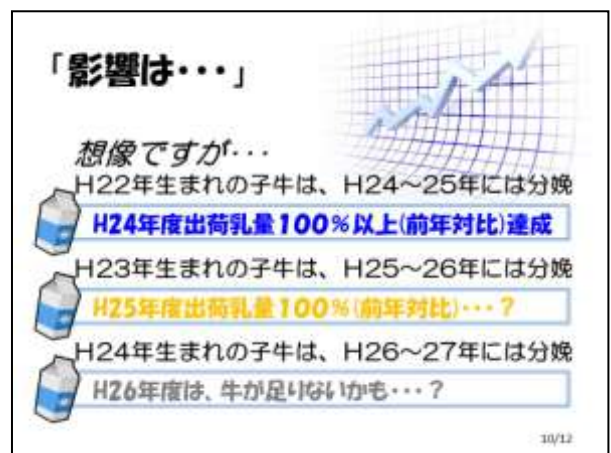


スライド 9

乳牛雌子牛については、どうでしょう？

「胎児・新生児異常」が7割以上を占めています。「胎児・新生児異常」といわれると一見、奇形等の回避できない病類に見えますが、これは病類区分における大類別で感染症・栄養失調・臍帯炎、胎便停滞、子牛虚弱症候群、呼吸障害もカウントされています。

いずれにせよ、多くの子牛が肺炎・下痢等、分娩時あるいは分娩直後の扱いに因果関係(図3スライド7、図5スライド9)があると考えられる病類で命を落としていることは、想像に難くないのです。

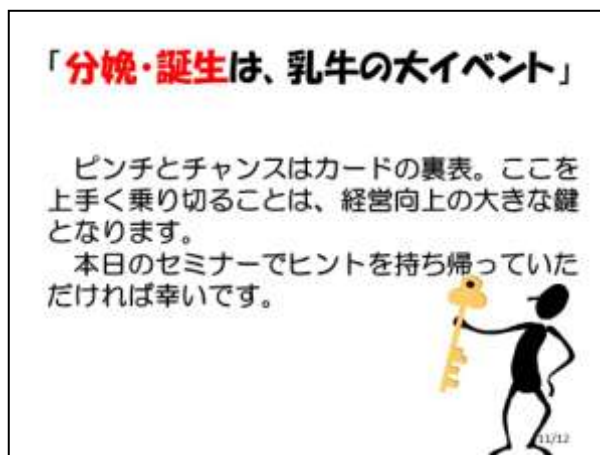


スライド 10

ということでどうやら乳雌牛が随分と死んでいるようです。更に図2(スライド6)に示したような、後継牛の減少が重なる地域においては、働き手である乳牛が足りなくなる可能性があります。

平成22年生まれの子牛と比較し平成23、24年はそれぞれ5%、17%頭数が減少していました。平成22年生まれの子牛は平成24年の生産乳量に平成23年生まれの子牛は平成25年の生産乳量に寄与したでしょう。その結果、生産乳量は平成22年比較で、平成24年はほぼ横ばい、平成25年は100%を割り込みそうです。

ということは、平成26年は……搾乳牛が不足して、生産量が更に減少するかもしれません。



スライド 11

繁殖管理に力を入れ「後継牛を増やしていくこと」は、とても重要です。また同時に不本意な理由で牛を減らさないことも重要なのです。

今日私が紹介したこと(分娩というイベントの前後に事故や疾病が多い!)は、普段きつと皆さんが感じていること、そのものだと思います。

私は「この時期を上手く乗り切るとは、酪農経営の向上につながる」と強く信じています。

この後お話しされます石井先生の講演内容、北支所中塚普及員の現地取り組み事例紹介は、まさにこの時期(分娩前後)の親牛や新生子牛の管理(分娩管理方法、新生子牛の管理等)に関するものです。

本日の講演内容を持ち帰っていただき、一つでも実践していただくことで、酪農経営向上の一助となれば幸いです。

ご清聴ありがとうございました。